

何故に私は今日も仕事なのですか…？
みんなとタイバニトークしたいよお！

って、初っ端から泣き言でスイマセン。
『らぶび』というPSUサイトで
エロ小説を書き散らかしている
清良（キョウ）と申します。

…サイトの方は開店休業状態ですが。
P s p o 2 i で新しい設定とか、
新事実が出てきちゃったりしたので、
「世界観把握できるまで、サイトの
更新はストップしとこーっと」と
思ったら、大震災が起きちゃったり、
私自身もバタバタしてたりして、
エロ小説なんか書いてる場合じゃ
ないよなーという状況に…。

…そして気が付いたらタイバニに
ハマっちゃってた不思議。

純粋にアニメにハマったのは、
小学生の時以来です。
（原作が好きで見てたアニメは
ちらほらありますが）

この歳にして、生まれて初めて
ニュータイプ買いました…。
15年ぶりにアニメージュ
買いました…。
アニメディアは20年ぶりに…。

なんでこんなハマった、私！？

徹夜しない主義（というか体力が
もたない）の私が、徹夜でこんな
ペーパー作ってますよ！
（ただいま12日のAM4：00）

寝ないでお仕事行きますよ…うふふ。
大惨事を起こさない事を祈る。

TIGER&BUNNY

に浮気中…。

時期的に、描いてる方多そうですが…浴衣。
折紙先輩が用意してくれて、みんなで
花火とか行ったりやったりすればいいと思うんだ！



そもそも見始めたきっかけは、
西田征史さんが脚本を担当される
という事だったので。

私、Eテレ（旧NHK教育）
大好きっこだなんです…。
『シャキーン！』大好きなんです…
という割に、朝は起きられないので
主に視聴してたのはザ ナイトの方
ですが！（苦笑）
『ママさんバレーでつかまえて』も
大好き！！
NHKじゃないけど、『おっぱいバレー』
も良かったよね。
西田さんの笑いのセンスがツボすぎる。

あとはやっぱりプレイメントの
システムに惹かれて…
作品中に実際の企業や商品を出して
タイアップを狙うというのは、
クリエイターなら一度は思いつくはず。
しかしリスクを並べ立てて強調されて
上司に却下されるはず。
それを見事に成功させてみせた！
悔しいけど拍手喝采！
って思ってる人、いっぱいいるよね？

そんな感じで見始めたんですが。
初めは「女の子かわいいなー。
さすが桂さんだなー」と思って
見てたんですが。
むしろ「なんだこの精神年齢ひっくい
変なヒゲのおっさんは」
「髪の毛くるくるの人は好みじゃないな」
とか思ってたんですが！！

いやもうなんなの！
こてっさん素敵過ぎ！
バニーちゃんかわいすぎ！
他のヒーロー達もみんな魅力的で、
ホント困る。ホントなんなのこの作品。

BD再生環境ないのに、
ドラマCDの為にBD初回限定版
買っちゃうくらいハマリ中…。

本当に、世界は一瞬で変わる。

それまでの世界に存在していたのはヤツと僕だけ。
憎しみに繋がるライン上にだけ僅かな灯り。
その他は背景の描かれたスクリーンとエキストラ。

ヤツを倒して、僕が舞台の中心に立った瞬間。
眩しいスポットライトを浴びて、四方を囲む壁が一気に取り払われたような気がした。

世界は光に満ちて、全てのものが立体的に見えた。
ビルや、木や、人の、陰影に富んだ魅惑的なフォルム。
形を変えながら流れる雲、光を反射する窓ガラス、水溜まりに
広がる波紋。

見ていたはずなのに、見えていなかったもの達が、視神経を優しく撫でる。
世界はこんなにも鮮やかで、美しかったのだと、陶酔にも似た心地がした。

この世界を僕に取り戻してくれたのは、あなただ。

暫定ポイント1位のお祝いという事で、虎徹さんが酒瓶を抱えてやってきた。
「おめっとー、バニー！」
『まだ混戦状態で、明日にでも抜かれるかもしれないから』と、会社の祝賀会は断ったのだが、「コンビなんだから、お前のお祝いは俺のお祝いでもある」と、家に押しかけて来たのだ。
まったく、虎徹さんらしい。
「ありがとうございます」
どうぞ、と促すと、「うっす」だか「おいっす」だか、よくわからない挨拶らしき言葉を発して、リビングへ進んで行く。

気が付くと、周囲にはかなりの空き瓶が転がっていた。
「僕は、虎徹さんにとって何なんですか」
普段はあまり口にしない焼酎が存外に美味しく、少し呑み過ぎたかもしれない。
「何ってお前…大事なパートナーだよ」
どんな話の流れで、こんな話になったのだったか。
「何ですかパートナーって。仕事上の相棒って事ですか？　じゃあ今はなんなんですか、プライベートですよ？」
コンビだ、パートナーだと言う割に、対等な立場だと思われていない気がする、という思いが今もまだくすぶっている。
強いて言えば、『弟』のような扱いだろうか。親友と言うほど対等でもなく、親子と言うほど自愛に満ちている訳でもなく。
少しだけ上から、庇護されつつも僅かに疎まれているような、ライバル視されているよう感じ。
「…バニー、酒入ると面倒臭い子になるのな」
目が据わってるぞ、と虎徹さんが苦笑する。
「近眼なので、目つきが悪いだけです」
何だか悔しくて、僕はケータイを手繰り寄せて、辞書を起動する。
『パートナー【partner】 1. 仕事などの仲間 2. ダンス・スポーツなどの相手 3. 配偶者』と書いてありますね。虎徹さんとダンスはしているつもりはありませんから…配偶者ですか？　僕はあなたの奥さんですか？」
「…奥さんは…、アイツだけだ…」
やはり苦笑いを浮かべながら、少しだけ視線を上に向けて、虎徹さんは自分の左手の甲を撫でる。
指輪や、ブレスレットに触れる指先から目を背けた先に、玩具のロボットがいた。
「…すみません。ちょっとふざけすぎました」
家族を失う悲しみは、誰よりわかっているはずなのに。
「ああ、いや、いいんだけどさ。大体バニーちゃん、男だろ？　子供産めねえだろうよ」
落ち込んだ僕を励まそうという気遣いなのだろうが、どうしてこの人はこう…センスが悪いと言うか…。
「虎徹さん、それは女性蔑視です。それに今の医療技術なら、同性同士で子供を作る事も可能だと思いますよ。運用にはまだ倫理的、法的な問題が残りますけど」
「へー」

「『へー』ってなんですか。…あなた、まさか僕の子供が欲しいんですか？」
悪趣味なジョークに、悪趣味なジョークで返す。
「アホか！　可愛い娘が一人いれば充分だっつーの！」
「ですよ」
「ですよ！」
はははは、と二人の乾いた笑いが薄暗い部屋に反響し、一瞬の沈黙が訪れる。
「…試してみる？」
「は？」
話を接ぐにしても、もっとマシな繋ぎ方があるだろうに。
「いやー、変な話してたら変な気分…」
「なりませんよね！？　普通なりませんよね！」
じりっと身を乗り出す虎徹さんに、不穏なものを感じる。
「美人な奥さんの事思い出しちゃったからかなあ…」
特徴的な形のヒゲを撫でながら、うんうんと頷く虎徹さん。
…何を一人で納得しているのだろうか。
「それは僕が悪かったですけど…あ、もしかして仕返しのためですか。ほんっと趣味悪いですね」
「違う違う！　あー、アレか。バニーちゃん童て…」
「変な事言わないでください！　知ってます！！」
「へー」
「なんですかそのニヤニヤした笑いは」
「べつつにー。いやいや誤魔化さなくってもイイって。カワイイなあ、バニーちゃん！」
…カッチーン。
「わかりました。では実践してさしあげます」
そのオヤジ思考の詰まった脳味噌に、洗練された都会のスタイルというモノを突っ込んであげましょうか。
「え、え…え？　俺が下？」
「何かご不満でも？」
「…や、優しくしてネ☆」
「無理です」
「ちょ！　ちょっと待った！　俺が悪かった！　バニーーーー！！！！」
後ずさる虎徹さんの掌が、落ちていた柿の種をパキリと潰す。
ああもう、明日の掃除が面倒になるじゃないですか。